まちづくり志向の実践『ほほ笑みの街プロジェクト』の意味するもの

ートリエステ地域精神保健システムの参与観察を通してー

○　Associazione di volontariato Franco Basaglia 小村絹恵（009100）、　岡村正幸（佛教大学・00926）

キーワード：ソーシャルキャピタル　まちづくり　イタリア精神医療改革

１．研 究 目 的

わが国の精神保健福祉領域における地域移行・再定住は、これまでの度重なる制度改革・実践の研鑽にも関わらず、「精神障害者が市民として地域社会に統合され、ごく普通に働きながらまちで暮らす」という状況には依然辿り着いていない。本研究では、イタリア精神医療改革の経験に学び、“まちづくり志向”で活動を進めているＡ市での『ほほ笑みの街プロジェクト』を取り上げ、わが国の改革推進に繋がる要因を探り、その方向性を提案する。

この取り組みは、イタリア映画『人生ここにあり』を鑑賞した際の地域活動支援センターに通う精神障害当事者の、「希望の映画や！社会的協同組合の仕組み、病気の理解があれば自分たちも働ける！自立した生活ができる！」という言葉や、また、自身が通う施設を「鍵はないだけで、ここも精神病院と一緒…それに俺も甘えてんねんけどな…」と吐露したことに端を発している。2013 年、映画のような社会的協同組合設立を目標とし、当事者・施設関係者・一般市民の有志を中心に発足し、まちの人々との繋がりを構築しながら仕事を模索する、要求だけでなく市民としてまちに貢献する趣旨のもと、様々な活動を行っている。その意図は、孤立を防ぎ、まちの居場所作り・繋がりの再構築などが、結果的にまちの精神保健福祉を高めることになるというまちづくりの視点での展開にある。この活動を通して其々に意識変革が生じているが、一般市民側にとっても同じく、精神障害者への恐れが消えて、他者への許容度が増すなど多様性を認める共生の視点を生み出している。

本研究では、イタリアの改革に学びながら進めているこのプロジェクトの数年の活動をもとに、ブリコラージュ的思考や活動領域の多元化、さらにその中での新たな人々のつながりの形成といったことが「精神障害者が市民として地域社会に統合され、ごく普通に働きながらまちで暮らす」ことを可能にする豊かなソーシャルキャピタルを生み出している要因について検証を行い、今後のわが国の改革の方向性についての提案を行うことを目的とする。

２．研究の視点および方法

発足の要因を作った当事者の言葉の背景は、まちで働き暮らす市民として生きることを保障する仕組みを映画から読み取ったことにある。一方、彼が抱いてきた施設に依存しないまちでの暮らしの背景とは何か。こうした対照的な現象の要因を探ることが、今日的な地域生活支援の課題を浮き彫りにするものと考え、映画の背景にあるイタリア精神医療改革を起こした当時の先駆者の声や現在も継承する実践とその思想を探るため、トリエステ精神保健局の協力のもと、バルコラ精神保健センター等にて半年間の参与観察を行った。そして、その結果得られた知見を参考にしながらＡ市の『ほほ笑みの街プロジェクト』の実践活動を進め、そこで実現したことの意義について考察した。

３．倫理的配慮

この研究における先行研究への配慮と共に現地調査等にあたっては、説明、了解、データの取り扱い等、学会研究倫理指針に基づき厳格な遵守義務を守り行った。

４．研 究 結 果

地域精神保健の基幹的センターである、バルコラ精神保健センターでのソーシャルワーカーは、対象者の地域生活支援を考える際、主体・家族・地域という３つの軸の状況の把握を重要視する。それは「根の無いところに人間は住めない」という思想に由る。つまり、地域で生活することは不安や恐怖を抱えることであり、その中で人間が生きていくには、自分のことを知る他者や場・関係性が必要だとする。したがってそれらがあれば、不安も軽減され症状を防ぎ対処可能となる。そのため、地域に介入し近隣の人々を巻き込み、ネットワークを構築していく。それは、多くの時間と労力を費やすが、個人や地域全体の精神保健の向上を図る上で重要な仕事と認識されている。それらの基盤には、専門的枠組みの閉ざされた場から、孤立することなく社会的枠組みの中で統合し、コミュニティを基盤に多様なネットワークをつくり出し解決を図ろうとする、イタリア精神医療改革が果たした実践を支える価値や方法の転換がある。A 市の『ほほ笑みの街プロジェクト』のメンバーは、精神障害者に加え自営・飲食業・学生・外国人・研究者等の様々な分野の異なる人々の集合体である。この多様さが活動の幅と可能性を拡げ、議論と活動を通して関係性を深めている。そして、病気や症状の話題に於いても、専門家の言葉ではない其々の生きてきた経験の言葉で議論され、相互に影響し合い、社会から差別されているという否定的認識の修正を可能にしている。このような多様な人々との新しい繋がりの形成が自己の世界の拡がりをもたらし、他者への信頼のもと、主体的で積極的な行動を生んでいる。こうしてトリエステ地域でのネットワークを構築する意図に、非常に類似した効果を生んでおり、街へ出て繋がりを作っていくイタリアの経験から学び実践してきたことは、既存の実践で超えきれなかった、非常に重要な意味を持つものといえる。

５．考察

強い人権意識を基に人間への深い探究に始まるトリエステの実践は、市民としてまちで生きることを保障する実践でもあった。取り上げた『ほほ笑みの街プロジェクト』の活動も、専門的な領域を超えた形で地域にまちづくりの活動を起こしていくことで、豊かなソーシャルキャピタルを生み出していくことの可能性を示している。それは、他者への信頼と寛容を強めて孤立や排除を防ぎ、まちで生きる人々全体の福祉向上や文化の問い直しに繋がる。一方で、専門的枠組みや関係者で囲う支援の在り方は、精神障害者は特別な存在に留まり、専門職は保護的役割を放棄できず、意に反して社会への統合を塞ぐ可能性すらある。市民として当たり前に働き暮らす支援の形成には、まず私たち自身が市民の視点で問題を捉えるように意識し、領域に留まらない専門性を越える実践を支える思考や視点、価値を構築していく必要がある。